

財団たより

多摩川

1979. 3 創刊号



早春の花オオイヌノフグリ



水面で遊ぶユリカモメ（日本野鳥の会提供）

■川のはなし■

① 川と自然

川は自然にとってかけがえのない存在です。

川が上流から運んでくれた栄養分に富んだ土と、尽きることのない水が、大地をうるおし緑を繁らせ、豊かな自然を川の流域にはぐんでくれます。この水と緑をたよって、鳥やけもの、そして昆虫などの陸生生物が集まり、たえまなく流れる水には川藻や魚などの淡水生物が住みつき、川独特の生態系をつくりだしているのです。

陸生の生物と水中の生物といった、全く違う環境に住む生物の生態を一度に観察できる場所はそう多くありません。しかも、この水陸2つの生物社会は、それぞれ独立したものではなく、お互いがつながりをもった一つの生態系をつくりだしているのです。たとえば、水中の川藻を魚が食べ、その魚を陸に住む鳥が食べるといった食物連鎖もその一例でしょう。

私達人間も又、こうした豊かな川の生態系に、長い間恩恵

をうけてきました。水もあり食料も豊富ですから、川の近くは住みやすかったのです。多摩川の近くの台地から、多くの縄文時代の遺跡が発掘されているところからもそれが理解できるでしょう。

もちろん縄文時代人ばかりが、川の恩恵をうけてきたわけではありません。現代に生きる私達ですら、水道の水源として、あるいはレクリエーションの場として川を利用し、たいへんな恩恵にあずかっているのです。

しかし、私達は川を利用するだけ利用していながら、逆に川の自然を追いつめてしまっています。川の水はどす黒く汚れ、水面にはゴミが浮び洗剤のあわがたち、川の岸辺はコンクリートによってかためられ、水も緑も、そこに生きる生物も、みんな私達人間の犠牲になっているのです。

〔「川」1976. 2と4とうきゅう環境浄化財団・涌井雅之より〕

発刊にあたって

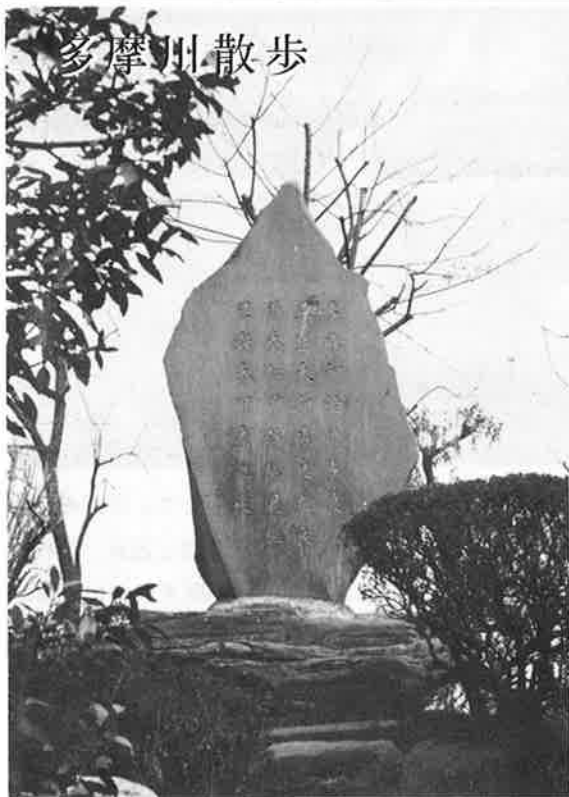
昭和49年8月設立以来、5年目を迎えました私ども(財)とうきゅう環境浄化財団は、その間、さまざまな事業を行なってまいりました。多摩川の問題に関する調査、研究への助成は、一般市民から専門家にいたるまで幅広く公募していく方式で、すでに48件(54年2月現在)に助成しています。又、下の写真にありますような出版物は財団独自で調査、編集したもので、多くの方々から暖かい助言をうけ、版を重ねてまいりました。しかしながら、こうした出版物を愛読して下さる方が年々増え、今や発行部数に限度がでてきました。できるかぎり、皆様の要望に答うべく増刷をしていますが、正直言って、これ程多摩川に関心をお持ちの方が多のに驚かされています。私どもの願いは、できるだけ多くの方々に多摩川の実情を知ってもらう事にあります。そこで、今回、そうした皆様の要望にお答えする意味と、さらに多くの方々に対するインフォメーションとして、この「多摩川」を創刊することになりました。紙面は限られていますが、発行部数をできるだけ増やし、内容もバラエティに富んだものとし

て企画いたしました。〈川のはなし〉は、川と自然、川と人間の生活など全般的な川のことについて記載する予定です。〈多摩川散歩〉は、多摩川流域にある史跡、文化財、レクレーションの場などを紹介します。〈甦れ多摩川〉では、多摩川を回復するために行なわれているさまざまな事例をレポートします。そして、〈市民の声〉コーナーでは、読者から寄せられたお便りや意見、あるいはエッセイなどを紹介し、紙面交流の場にしたいと考えています。環境回復に役立つことでしたらどんな事でもけっこうですからお寄せ下さい。〈編集室だより〉では、財団の事業案内や、最近の多摩川情報などをお知らせするコーナーにしたいと考えています。そして、この紙面内容は必ずしも固定するつもりはありません。皆さんの御意見によって自由に編集していくつもりです。

川を甦らせようとする運動は全国に広がっています。この紙面を通して、多摩川の環境回復に向って、皆さんとの交流の糸口がつかめれば幸いに存じます。



多摩川散歩



狛江市には、かつての武蔵野の生活史を物語る数多くの史跡や寺社がある。こうした貴重な文化財のひとつに、「玉川の歌碑」がある。小田急線狛江駅から福祉会館の方に向かって10分程歩いて、ちょうど多摩川の堤防に向かって下り坂になるあたりで細い露路を右に入っていくと、思わず見すごしてしまいそうな民家の庭先にたっている。多摩川の方

玉川の歌碑には、
 万葉集の東歌が刻まれている。「多麻河泊爾、左良
 ステツクリ サラサラニ ナニゾノコノ ココ
 須豆久利、佐良佐良爾、奈仁曾許能兒能、己許
 ダカナシキ
 太可奈之伎」

昔は、この丘の上から多摩川の流れが見おろせたのかもしれないが、今ではまわりに建てこんだ住宅にさえぎられて、流れの音すら聞こえそうもない。この碑は最初文化2年(1805)に建てられた。しかし、10年後に洪水にあい行方が知れなくなってしまった。その後大正13年(1924年)に新しく建てられて今日に至っている。

碑文の意味は、村の女たちが多摩川のきれいな流れの中に入って、手織った布をさらしている情景を詠んだものである。狛江(こまえ)の地名は、1000年以上も前、高麗から帰化した人々が住みついた所の意味としてつけられたらしい。その高麗(古い朝鮮の呼び名)から来た人々は、さまざまな文化を日本にもたらしたが、織りものの技術もそのひとつであって、近くの「調布」や「布田」といった地名もその名残りとどめている。

「玉川の歌碑」の近くには、「兜塚古墳」、「伊豆美神社」、「泉竜寺」などの文化財が多く興味深く見ることができる。通りに出て坂を下ると、もう多摩川の流れが見える。堤防の上に立つと、上流の方には、川崎市発展の源動力となった二ヶ領用水の取水堰である上河原の堰堤、下流の方には、多摩水道橋、小田急線鉄橋、そして、もう少し下ると宿河原堰などがある。堤防の近くにある松林あたりは、テレビや映画の時代劇を撮影する絶好の場所になっている。

春の多摩川は河辺の植物が芽だちはじめてきれいだ。暖かい日差しをあびながらこうした史跡を訪ねてみるのも楽しいものである。

狛江市周辺案内図





最近の多摩川の水質汚濁に関する情報を総合してみると、下流部の汚濁は進行がストップしたようだが、中流部の汚れが目立ちはじめ、汚濁の分布域が上流に向かって広がっている事がわかる。水質汚濁防止法などの規制によって、極端な汚れはなくなったとはいえ、可もなし不可もなしの状態が広がっている事は、決していい事ではない。水質汚濁の原因は、言うまでもなく工場や家庭から流れ出る排水によるものである。一部に下水道を完備すれば多摩川の水質は完全に回復するという意見もあるが、決してそうとは言えない。現在、下水の処理は二次処理といわれる段階まで行なわれている。しかし、この段階ではチッ素やリンなどの物質はほとんど処理されていないため、今までとは異った水質汚濁の傾向が生まれつつある。それではチッ素やリンなどの物質を何とか除去できないかということ、技術的には充分可能なのだが、除去する為には費用がかかりすぎるのである。この様な下水道による河川の水質改善とは別に、河川を浄化する方法を模索する為建設省京浜工事事務所では、河川敷を使って水質浄化の実験を行なっている。場所は府中市押立にある北多摩1号処理場前の河川敷。実験の概要を説明すると、河川敷内に、幅3m、長さ50m、深さ1.5mのコンクリート水路を2基つくり、その中にそれぞれ、近くの川原からとってきた、土砂混じりの砂利を入れた水路と、2～10cm大の石コロのみを

入れたものが作られている。そして、それぞれの水路の端から同じ水質の汚水を流し込み、砂利の間を浸透する間に水質がどの程度きれいになるかを調べるのである。水が浸透して行く途中には10ヶ所程、水を抜きとる装置が設けられていて、定期的に水質分析を行なっている。この方法は、本来河川の持つ自浄機能を利用したもので、砂利の層を浸透する過程で、砂や石コロの表面に付着した藻類に汚濁物質を吸収させ、浄化しようとする考えである。実験の結果は、全般的に良好な成績を示しているが、結論を出せる段階までにはいたっていない。それに、実用化を行なうにしても、さまざまな問題がある。例えば、増大する汚水量をまかなうには、途方もない面積が必要だろうし、又たとえ藻類などの生物によって汚濁物質が吸収固定されたとしても、河川敷内で行なう以上、川の中の汚濁物質の絶対量は変わらないのである。だから何らかの形で回収する方法を考えなければならない。しかし、こうした汚濁回復への試みは決して途絶えさせることなく続けていくべきで、いつかはこのような試みが、水質を回復するための手だてとして役に立つはずである。川からきれいな水をもらい、使った後で汚れた水を流すということでは、いつまでも水質の回復は望めないきれいな水をもらったら、元の状態にして返すのが私達の義務であろう。その為には、どんな努力も惜しんではならないのではあるまいか。

私と多摩川

日野の自然を守る会 飯島利三

東京に自然はないという。確かに私たちの身のまわりには自然と思われる風景はたいへん少なくなっている。道路は舗装され、建物は空に向かって年毎に高さを競い合っている。橋はコンクリートや鉄骨で固められている。台地は宅地化され、丘陵も平に削られてコンクリートの大きなブロックが立ち並び始めている。農家の人々は冬仕事である雑木林のくずはき、を忘れ、子供たちは小川にかけられた一本橋を渡る楽しさを失っている。昔も今も変わらない景色は僅か水田や畑地、開発効率の悪い段丘崖にかろうじて残っている。そう、さらにもう一つ、多摩川や浅川の河原がある。戦後しばらくは砂利採取が続けられていたが、大きな人為が加えられずに、古い昔からの姿をそのまま今も伝えてくれている。

川は人間生活にとって重要であった。河岸段丘に見られる縄文・弥生等の先人たちの多くの遺跡が私たちに語ってくれる。そして川は自然の恐さや厳しさをもっともよく教えてくれる師の一人であった。沖積地へ切り開いた耕地が幾度となく洪水で流され、川との長い相克の中からたくさんの教訓を学び取り、自分たちの安全な生活を確保した。川との戦い、争い、競い合いが人間に知恵を授け、文明の発展に大いに貢献している。人々は川を神として奉ることによって安息を求め祈願し、

感謝してきている。

日本の四季の変化はすばらしい。とりわけこのすばらしさに箱庭的地形が借景として役立っている。鉄道唱歌にうたわれたことばは本当によく日本の地形の特徴を表わしている。地形の変化は多く河川によってつくられている。多摩川は都民にとって深いかかわりを持ってきた。古くは運搬路や漁場として、最近ではエネルギー源や水資源として欠くことのできない存在である。冬のある日、河原に立って周囲を見渡すと水鳥たちが群がり、戯れている。彼等の楽園である。それを見ている自分もまた彼等との共有の瞬間に満足を感じる。春は枯れ草があざやかな緑に変わり、野草が沈黙を破って開花を始める。また野鳥の営巣期でもある。野鳥の大合唱にうっとりとして耳を奪われる。夏には水遊びを楽しみ、川の恩恵と偉大さを知らされる。川魚がのびのびと泳ぐ姿は自分の幼年時代を思い出させる。秋にはカワラノギクがすばらしい。じっと眺めていると自然の造営力の神秘にすっかりとりこにされてしまう。ほんとうの自然はこういった野草の中にあるのではないかと思う。このような自然の美しさに感動を受けた人は、きっと人間の生命の次に自然の大切さを訴えていくに違いないと思う。

〈編集室だより〉

毎年3月は、多摩川シリーズの作成に追われ大忙しの時期です。今年は、この財団だよりも新しく発刊する事になり、スタッフ一同はりきってきました。この紙面はできるだけ多くの方々と交流

の場を設けるという意図のもとに生まれたものです。紙面構成は皆様の要望をできるだけ多く入れできれば皆様の手で作っていただけるようにしたいと考えています。意見なり投稿をお寄せ下さい。季刊の予定です。

財団の事業紹介

設立以来、5年目になりますが、これまで多くの方々の御協力を得て貴重な研究や啓蒙に関する事業を行なって来ました。その活動内容について紹介したいと思います。財団の活動は、二つの活動に分けられます。

そのひとつは、多摩川的环境浄化に寄与するあらゆる調査、研究に対する助成金、援助金の交付です。これは、申請された方々の書類を審査し決定されるのですが、現在まで48件の調査研究について助成してきました。そして、その成果として次の7研究についての報告書「助成集報第1巻・1977」が完成しています。

助成集報は財団事務局にそろえてありますので参考になさりたい方はお問い合わせ下さい。

もうひとつの活動は、財団が独自に行なってい

ます調査活動と流域に住む方々を中心にした啓蒙普及活動です。調査活動は、昭和50年度から52年度まで行なった多摩川流域自然環境調査報告(第1次～3次)で、流域内の「水質」「魚類」「底生生物」「植物」「野鳥」「動物」「リモートセンシング」の7テーマで、すでに報告書が完成しています。それに「多摩川シリーズ」と称し、1975年より多摩川の自然や歴史文化、環境問題とその年の話題を中心に総集編、資料編の2冊を毎年発行してきました。今年は「多摩川'79～今、川を考える～」として6月中旬に完成の予定です。その他、「川」という普及版も1976年に発行しました。この雑誌は、川全般の問題と、多摩川の事についてできるだけわかりやすく編集しました。まだ多数ありますので御活用下さい。

〈研究課題〉

- 多摩川水域における有機物の存在形態とその起源に関する研究〔主として微量有害未確認有機物の同定について〕
- 多摩川周辺地域における環境整備に関する実地研究
- 多摩川に関する応用地理学研究
- 都市生態系における河川、多摩川流域における生態系の動態に関する研究
- 多摩川及びその流域における植生環境の基本問題ならびに植生基盤の条件に関する調査研究
- 多摩川流域容量について
- 多摩川流域における河川底質土を中心にした汚染物質の挙動および自然浄化能力について

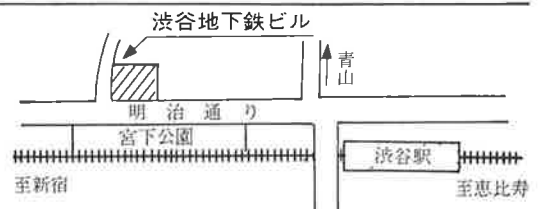
〈代表研究者〉

半谷 高久
川口 士郎
市川 新
沼田 真
江山 正美
佐橋 義仁
堀内 清司

〈現職〉

東京都立大学理学部教授
東京都立大学工学部助教授
東京大学工学部助教授
千葉大学理学部教授
東京農業大学農学部名誉教授
(株)建設技術研究所技師
日本大学文理学部教授

- 発行日 昭和54年3月20日
- 編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団
〒150 渋谷区渋谷1-16-14
(渋谷地下鉄ビル内)
TEL (03)404-9142



*印刷所 雄文社 〒336 浦和市常盤9-11-1
TEL (0488)31-8125